

## 歴史を引き受ける交流の詩人

水崎野里子詩集『ゴヤの絵の前で』刊行に寄せて

佐相憲一

一

今年二〇一〇年はバンクーバー・オリンピックの話が巷を賑わして始まった。スポーツを通じて多くの日本国民が世界のさまざまな国の人々のことも考えたに違いない。

また、南米チリで悲惨な地震が発生し、それが環太平洋造山帯でつながる日本の太平洋側に津波となつて波及したので、多くの日本国民があらためて地球のつながり具合について考えたに違いない。

さらに、今年には日韓併合一〇〇年ということであつて日本が国家的・日常的に侵略し支配し深く傷つけてしまった朝鮮半島や中国の人たちとのこれからの平和尊重交流と過去の歴史の直視が各分野で議論されるに違いない。

に日本のかつての特攻隊兵士なども含め、戦争などの歴史と国家関係に翻弄されてきた市民個人個人の苦しみ、悲しみを詩の形で今に甦らせ、文字で永遠へと刻印している。誰かがやらなければならない重要な文学の仕事である。

それだけではない。水崎氏の詩は外から状況を記すところにとどまらず、作者自らが実際に世界のさまざまな人と対話し、内面にとりこんで悩み、思考を発展させ、提言し、呼びかけるところまでですむ。能動的な語りの精神でこちらの胸に生き生きと言葉を届けているので、読んだこちらもいろいろ考え、実行したくなるのである。このようなタイプの詩は現代日本ではとても貴重で、二十一世紀のアジアと地球を見すえた詩人と言える。

その視点はすでにコールサック社から二〇〇八年に刊行された詩論・芸術論集『多元文化の実践詩考』で明確に展開されていたが、この分厚い力作詩論集の精神が、実際の詩作品として活かされているのが本詩集と言えよう。「多元文化」の視

一方、アメリカ軍は依然としてアフガニスタンに展開しており、沖縄では米軍基地の日本国内のたらいまわしに市民の反対運動が大きく盛り上がっており、ヒロシマ・ナガサキから長年発信されてきた世界規模の反核世論もいっそう熱くなるうとしていく。

このような二〇一〇年。ここにふさわしい一冊の詩集が刊行された。水崎野里子氏の『ゴヤの絵の前で』である。しかも、収録されている作品群は、現在の世界と日本の状況に合わせて慌てて書いたというのではなく、この数年間に作者がさまざまなところに発表してきたものであるから、今この新年の状況でのあまりにもタイムリーな内容に、作者が長年熟成させ実践してきた詩想の先見性と本質を見る眼の確かさに、私は脱帽するのである。

展開された詩世界は、傷ついた者、傷つけられた者の側に立った視点を持ち、アジアの中の日本、世界の中の日本へと読者の心をひろげてくれる。そして、世界中の戦争被害者、虐殺被害者とも

点、それはまさに現代において政治レベルから日常生活の関係レベルに至るまで必要なものである。日本人でありながら他国人でもある心、戦後世代でありながら戦前の痛みを受けとめ未来ともつながる思考、常にマイノリティの痛みに敏感な眼、民族・宗教の違いから個人のさまざまな違いまで共に生きる現場でふつかる難問を避けずに自らの中に引き受ける積極性、など。この詩集を読んでいると、私たちはひとりひとりが歴史を引き受けるべき存在なのだと思感する。

二

では、詩集の中味を見てみよう。

タイトル作品「ゴヤの絵の前で」には、この詩集全体のテーマと方向が力強く、しかも繊細に表現されていて、胸を打たれる。読者は古典絵画に案内されるが、そこで示唆されるものは現代世界に共通する戦争の本質と芸術家の良心である。侵略され殺された民衆の側に立ち、侵略戦争を刻印・告発した十九世紀のスペイン画家ゴヤの絵。

その絵に現代アイルランドの民衆の苦しみを重ねて詩にした北アイルランドの詩人シェイマス・ヒーニーの作品を通じて日本でこの絵を知ったという作者。スペイン・マドリードのプラド美術館で実際にその絵の前に立つ作者には、当時のスペインのことから次々と連想が広がっていく。

#### 〈南京虐殺〉

ユダヤ人虐殺

ヒロシマ ナガサキ

ソンミ村の虐殺

独立を願うアイルランド人民の復活祭の虐殺  
スターリンによる反逆者の虐殺

イラクで

アフガンで

ホロコーストはいつの歴史からも去りはしない  
い

(作品「ゴヤの絵の前で」から)

ここには水崎氏の類い稀な想像力が感じられる。ナポレオン時代のフランス軍に侵略されたスペイン民衆の絵を見て、「大昔の戦争の絵か」で

終わってしまったのが大方の日本人ではなからうか。ところが、それはまさに現在、歴史認識をめぐって復古的な危うさをいまだに抱えた日本の教科書問題や靖国問題、ぎくしゃくした日中関係などの根源を類推させるものなのである。ゴヤの絵を見て作者は真つ先に日本軍国主義が犯した南京大虐殺を考える。そして、イラク戦争に至るまでの世界のさまざまな歴史的事件へと連想はひろがって、現代世界のこれからの平和への道のり忘れてはならないものを胸に刻むのである。

さらに、この作品の複眼的視野は、「歴史と芸術家の関係」という側面をクローズアップさせている。それがもうひとつの重要テーマであり、〈宮廷絵描きと呼ばれた〉ゴヤが毅然とその絵を描いたという点に深い意味があるのである。シェイマス・ヒーニーにしてもノーベル文学賞を受賞した詩人である。そのような人がゴヤの絵を見て現代アイルランドの悲劇を連想したと書く。さらにそれを見つめる日本人の作者がいて、こうしてゴヤ、ヒーニー、作者、という重層的な影響関係が一篇の詩の中に総合されているのである。それは、過去の歴史を現在の世界の課題に活かし、こ

れからの勇気に変換していく能動的な精神であり、歴史や社会から目をそらさない芸術のあり方である。ゴヤやヒーニーなどの生き方に学び、それに連なるうとする作者の真摯な姿勢に共感する。

#### 〈ゴヤ「一八〇八年五月二日」「一八〇八年五月三日」の絵の前に立つ〉

二〇〇六年四月二十八日

暑い午後〉

(作品「ゴヤの絵の前で」終連)

### 三

詩集は三部構成になっている。

第一部では、タイトル作に続いて、一九一九年日本の植民地支配とたたかった朝鮮の三・一独立運動犠牲者たちを追悼し、その思いを静かに今に伝える「赤い雪」、朝鮮人独立運動家と愛し合いながらも日本の官憲にとらえられ獄死した日本の女性の胸の内を想像会話文の形でつづった異色の「遠い声・金子文子」、南京大虐殺に取材し、中

国の人々との交流をうたう二作「屠殺」「崔さんと・上海から南京への旅」と続き、真珠湾攻撃とアメリカ民衆との交流を書いた「真珠湾への旅」を経て、今度は加害国・日本の中の被害者でもある特攻隊兵士の悲劇を書いた「知覧」、悲惨な地上戦のあった沖繩を書いた「ハイビスカスの赤い花」「丘」「ガジュマルの樹」に移っていく。そして、ヒロシマの「影」である。第一部の最後の作品「灯籠流し」は、広島も含む世界中の殺された人々にその対象をひろげており、水崎氏ならではの新たな地球感覚の命の祈りが詩情豊かである。この第一部は特に光る作品群で、アジアの批評性や詩の多様な形式なども見られる。背筋が伸びる、厳しい批評精神である。

### 四

第二部では、海外での交流で作者がぶつかった日本人としてのあれこれの複雑な問答が生き生きと伝わる。作品「シンガポールの原爆資料館にて」「マレーシアの友人」では、詩の集まりなど

で原爆の話題になり、アジア侵略国・日本からの解放の一コマとして原爆を肯定する向きがあることを知る。そして作者はそのような場で日本の歴史の負の遺産を自ら引き受け、アジアの人たちの感情を受け止めた上で、なおかつヒロシマ・ナガサキの声を自らの声とするのである。世界の人々の前で自らに問いかけ、他者に語りかけていくこの詩人の爪の垢を、いまだに日本軍国主義を美化する愚かな政治家たちに飲ませたいものだ。そして、ヒロシマ・ナガサキから再び詩人の作品は、韓国へ、それも「従軍慰安婦 キムさんのために」「ソウルは雨」の様子を伝えるのである。この構成で日本の現代詩人が書いているということ自体が希望であろう。

## 五

第三部は第一部、第二部と共通の世界的視点であるが、どちらかと言うと、旅の空での歴史考スケッチというトーンの商品群である。「古い旅行靴」ではアメリカの日系人博物館に展示された古

い靴や写真などに、かつての日系人たちの大変な苦勞と悲劇などを読み取って共感的に作品化している。この視点も水崎野里子氏ならはた。「ピエタ像」という作品では旅先で「十字架から下ろされた／キリストを抱く、母（マリア）のピエタ像が多いことに気付いた作者が、次のように現代世界の民衆の願いと結びつけて詩想する展開が深い。

〈マリアがキリストを膝に嘆いている

息子の死を天に嘆く母

でも なぜ今 ピエタ像そして

聖母の嘆きを思い出すのかしら？

このごろ あちこちの報道写真で見ると

死んだ我が子を抱く 父親 母親の姿

写真は親の嘆きの声を伝えられない

サイクロンで 地震で 戦乱で

パレスチナ アフリカ イラク 世界中の

幾多のピエタ（悲しみ）の姿

でも 彼ら 小さなキリストたちは

寺院なんて建ててはもらえない〉

（作品「ピエタ像」より）

そして、詩集最後には作者自身の今は亡き父親のことが出てきて、今でも作者の心のよりどころとなっている幼い日の父の物語朗読の優しい声とともに、戦争体験者として父がもっていた兵隊日誌を娘が大事にもっていることが明かされ、詩的余韻がじわっとひろがる。

## 六

そんな詩人の言葉に共感すると、ではいったいこの詩人はどんな道を経てきた人なのだろうと興味がわく。本末尾に掲載されている略歴を見てみよう。四ページにわたって紹介されているそれも元氣いっぱいのもまぶしいもので圧倒される。なるほど、と納得する。

水崎野里子氏は一九七〇年代後半以降、今日に至るまで、英文学と比較文学の研究・詩作・翻訳を通して、ひろく世界で活躍し、地道に交流を深めてきた筋金入りの地球人である。そして、一方

では大学で若い人たちに教えながらの交流、他方ではシェイクスピア研究を足がかりにアイルランド文学、アメリカ黒人文学、そしてアジアの文学という道を通って、まさに今の水崎氏の詩世界と評論世界の核心をなす幅広くユニークな視点を獲得してきたのである。

一九九〇年代、二〇〇〇年代と、いよいよ評論集、翻訳書、自らの詩集、共訳本、など旺盛な出版活動に入る。そして、あとがきでも述べられているように、二〇〇七年コールサック社刊行のアンソロジー『原爆詩一八一人集』英語版の共訳にたずさわり、翌年の詩論集『多元文化の実践詩考』を経て、この激動の二〇一〇年、本詩集『ゴヤの絵の前で』刊行となった。すでにこれは第七詩集である。

こうしてたどってみると、世界の中で活躍するこの人の見てきたもの、感じてきたもののスケールは歳月と共にいよいよ大きくなり、一方では世界文学やマイノリティなどの比較研究、他方では自ら出かけて現地で対面対話してきた交流経験の総和がこうして切実な問題意識と先見性に結実しているのだろうと推測することができる。

水崎氏は、歴史を引き受ける交流詩人だ。その言葉は、現代に生きる苦しみ多い私たちに、これからの世界のありようを過去からの光で共に考えようと呼びかける、さわやかな生きた言葉である。

水崎野里子詩集 『ゴヤの絵の前で』 栞解説文

佐相憲一

コールサック社

2010